

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学  
所 属 保健医療学部看護学科  
名 前 東村志保  
作成日 2023年11月10日

## 1. 教育の責任

2022年4月に本学へ着任し、これまでに私が担当した科目は、旧カリキュラムにおける学部2年生必修の在宅看護方法論Ⅰ、3年生必修の在学看護方法論Ⅱ及び在学看護学臨地実習、4年生必修の在宅看護学統合実習及び看護研究Ⅱ、新カリキュラムにおける学部1年生必修のナーシングスキル学Ⅰである。いずれも科目も担当教員の方針と指導の元で部分的に担当した。担当以外の時間には領域内外の教員による講義を聴講し、教授方法や学生の様子から本学における教育の展開について学びながら、看護学科における教育の責務と学生のニーズを図り、自らが可能な参与を行ってきた。本学に在籍してから1年半が経過し、最重要課題は、高度に専門分化を遂げた多様な医療の現場へ、正しい知識と基本的な看護の実践力を備え自ら思考し行動することができ、看護専門職としての責任感と倫理観を持つ人材を育成し輩出することである。

## 2. 私の理念・目的

### 1) 私の理念

私は、看護師として13年余りの実務の経験ののちに主に看護研究職として従事し、教職としては、教育の実践や運営などの全般においてたいへん未熟であると自覚している。しかし、学生の個々の性質や学修の状況に応じた働きかけで学生自身が成果を得た時の充実感や共に成長できる喜びを得て、教員として自らにできることを模索し、相応しい態度や資質について追求する努力を続けている。

教育において私が大切にしているのは、学生自身が持つ顕在的・潜在的な可能性を引き出し自律的な成長を支える姿勢と距離感である。学生は学修の過程で自らの物事の認識や価値観、理解の様式、あらたな物事に対処する力や得手不得手の傾向、生活や学びの環境などに合わせて学修スタイルを確立していくが、各々により獲得される内容や進歩は多様であるため、集団指導に加えて個別的なアプローチによる方策が必要となる。各々の学生が得手とするものを最大限に活用し、独自の興味関心や着眼点が必要な情報と方法を得て深化・拡張・連関・発展し、自律的に学修の目標を達成することが学生自身の成長につながる成功体験になると考えている。そこに至る教員としての行動の基盤として、看護学教育モデルのコア・カリキュラムに準ずる本学のポリシーに対応し指導計画に加え、個々の学生に対する継続的な学修支援計画が必要である。ひとりの教員として、私は、学生個人の強みを見極め、個人の歩みに並走し、忍耐強くアプローチすることを信条にし、それを自負している。

### 2) 理念をもつに至った背景

これまでに私の中で形づくられてきた教育の理念は、その大部分を私自身の看護師としての臨床経験より影響を受け、また、本学における直近1年半余りの教員経験に依拠する。約20年前、脳神経外科の看護師として排泄ケアの改善に取り組んだ

際には、それぞれの患者の持てる力、変化する病状や環境に合わせて排泄自立支援を計画し、患者自身の意欲や思いを尊重した動機づけや適応を助ける個別的で柔軟なアプローチが効果的であることを学んだ。さらに、臨床経験としては直近となる訪問看護師としての仕事は、多様で個別性が高い在宅療養者への接近や関係性の確立及び支援の具体的な方策を培う土壌となり、生涯にわたって変化し成長し続ける存在として対象を捉え、その力が最大限かつ効果的に活かされるよう支援することが自律的な自己実現とその人の「幸せ」の獲得に寄与しうること、それには、直接的・間接的な不断の関わりが重要であることを学んだ。看護専門職としてのそのような態度は、ウェルネスやストレングス、レジリエンス、アドヒアランス、生涯発達等の理論によっても裏打ちされ、教員となり対象が学生となった現在においても私の思考や行動と強く結びつき、本学においてはプラグマティズムに類すると考える実践的な学習理論や看護実践者におけるコンピテンシー理論を連結し、日々の教育実践をもとに自らの教育的アプローチを改革する複合的な過程の経験途上にある。

### 3. 教育の方法・戦略

本学における学生との主な教育的関わりの接点は、座学による講義、集団と小グループによる学内演習、小グループ単位の臨地実習、チューター制度による学修支援の場である。本学のカリキュラムの構造と教育の内容を理解し、学生と関わりを持った時点における理解度や学修の到達度を確認してニュートラルポイントとし、看護専門職としての基本的な知識と技術および態度の獲得を必須の到達目標とした自律的な学修の実現につなげるための方略を意識している。単に知識を増やすのではなく、学生自らがそれを活かし、他者との関わりにおける実践のなかで焦点化や拡張を繰り返して発展的な思考の獲得に繋がるよう、熟考し表現する機会を大切にしている。また、自己の自律とともに他者の自律を尊重し、共存共生の中で成長する機会としてのグループ学習におけるダイナミクスを重視している。さらに、本学に就学する以前の学修状況の個人差に対し、学士課程において可能な限り格差を解消し、かつ、個のレベルにおける順当な成長が望めることに注意を払っている。

また、看護学は日進月歩の学問領域であり、言うに及ばず教育者として時宜を得た自己研鑽は必須である。本学では、少子高齢社会の地域包括ケアシステムにおける実践力を重視した看護師のコンピテンシーと学部学生の教育について特に注目し、自己のアップデートに取り組んでいる。

以下に、着任以降の具体的な教育的取り組みを挙げる。

・在宅看護学方法論Ⅱ:看護師が行うケアとして実施頻度が高く、安全の確保に複合的な知識や状況判断力を必要とし、基礎の演習や臨地実習では経験の機会が少ないために新任看護師にとって難易度が高い排便について、臀部の人体モデルと擬似便を用いた演習を展開した。

- ・在宅看護方法論 I:在宅療養環境において看護師が遭遇する頻度が高い感染症を取り上げ、微生物学などでの既知の学修状況を考慮した反転授業を行った。
- ・来年度に開講予定である新カリキュラムの在宅看護方法論について、対象となる学生の現時点における学修の特徴や到達度を踏まえ、本学のカリキュラムにおける他の授業との繋がりを持ち、在宅看護の特徴や訪問看護師の専門性について知識が思考・判断・行為と連関し発展的な学修となるよう、仮想事例を用いたアクティブ・ラーニングの導入を計画している。
- ・臨地実習:在宅療養者の特徴や在宅看護のバックグラウンドとなる理論について学生の理解度を確認し、在宅療養者宅への同行訪問で得た情報や経験が学内での学修と連関して対象者の全人的な理解や個別性を尊重した看護過程、看護師としての独自の役割機能や看護観についての考察に繋がるよう、学生自身の気づきに端を発する学びの発展的な方向性を見定めに重きを置いた個別のディスカッションを繰り返し、定例カンファレンスで統合し、臨地指導者との協働体制で支援した。
- ・統合実習・看護研究 II:従前の臨地実習で得た独自の気づきや着眼点をもとに学生が各々の思考を拡張し発展させ、看護の臨床におけるニーズを自らの眼で確認し、各人の研究課題を明確化して実効性のある計画に繋がられるよう、良質な資料等による情報の提示やディスカッションを繰り返し、個々の強みと培われた力による統合的な学修を支援した。
- ・2022 年度入学者のチューター活動:年 4 回の面接と教務システムの活用により担当学生の生活・健康・学修の状況を把握し、個別の指導と相談対応を行った。新年度の担当教員の交代に伴い、前年度の担当や教務委員等と協力し、新たな支援関係の構築と継続的な支援を実施している。
- ・学生支援委員会活動:保護者(保証人)との情報共有と協力関係の発展を目的とした説明会の運営への参画等、学生生活の支援に向けた活動を行っている。
- ・図書委員会活動:大学が医学系出版社と契約し提供している国家試験問題の Web サービスについて学生に対する情報提供やアンケート及び利用状況等のモニタリングを実施し、利活用促進のための活動を行っている。

#### 4. 学習成果

- 現時点において評価指標が明確でないため、学修成果については散文的な記述に止める。
- ・在宅看護学方法論 II を受講した学生より、説明がわかりやすく理解がすすんだ、といったコメントが寄せられた。
  - ・統合実習・看護研究 II で担当した学生より、看護学生としての学びや看護専門職としての自らの課題が客観的かつ論理的に記述されたレポートが提出された。また、独創性が高く、独自の着眼点と論理的な背景の構築が明確な看護研究のレポートが提出された。

・国家試験問題 WEB サービスの利用者数が増加し、国家試験対策や日々の学習に活用中であるとの声が学生から聞かれるようになった。

## 5. 改善のための努力

学生への教育効果の評価指標を明確化し、教育内容の具体的な改善に取り組みたい。評価指標として以下を設定し、実効性と満足度が高い内容への継続的な見直しや改革を連携する教職員との共同のもとで実現したい。

- ・学生の出席率
- ・知識、思考・判断力、表現力、主体的態度、満足度を主要項目とする形成的評価
- ・学修目標の達成率

## 6. 今後の目標

### 1) 短期目標

- ①来年度に展開される新カリキュラムの在宅看護方法論について、主担当者として具体的な講義の構成と授業展開の方法及び評価方法を決定する。
- ②チューター活動の中間評価を実施し、現状の課題を明確化する。

### 2) 長期目標

- ①担当科目やその他の教育活動について、領域内外の教職員と相談や意見交換の機会を設け、教育方法の構築や運営において協働し、教育評価の向上に貢献する。
- ②担当科目やその他の教育活動について、自らの教育理念を実践レベルに反映し、各々の方法論を明確化する。

以上